

かたの瓦版

この時、交野は動いた

「伊丹一族傍示の里に」



下り藤に加の紋章瓦

今から 449 年前(1573)、摂津伊丹城にいた伊丹一族は、その城を織田信長の兵に陥られ、河内交野郡竜王山のうしろの傍示山に、その居住を定めたのである。

昭和 33 年、片山長三氏は町史資料を求めて、奥野平次氏とともにこの村を訪れた時、伊丹櫓三郎氏は同家の紋付羽織を出して、この一族の紋章「下り藤の中に加」を示し、その祖先は加藤氏だったといった。加藤氏の祖先は遠く奈良時代、藤原不比等（ふひと 659-720）：鎌足の子供。大宝律令・平城京遷都の孫、左大臣魚名から出ている。

魚名八代の孫吉信は加賀守となり、その子重光から加賀(石川県)に住んだので、その姓を加賀の藤原すなわち加藤と称した。

これがこの一族代々下り藤に加の紋章をもつゆえんである。

その後六代の孫加藤景員は源氏に仕えて伊豆(静岡県)に所領を与えられたが、さらに九世の孫加藤七郎景助は、下野(栃木県)にいて足利尊氏に仕え、以後代々足利氏の家臣として室町時代に及んだ。

伊丹一族傍示に入る

この時織田勢は手分けて、あちこちで残敵の掃討をはじめ、伊丹・池田の城はすでに陥り、残るは淀と芥川の城だった。

芥川城に拠るのは、將軍義昭の無二の味方なる和田伊賀守惟政で、そこへ伊丹兵庫頭の一族および池田八郎三郎勝政(池田城主)等がともに立て籠もった。

この城を攻めたのは、同じ摂津の荒木村重だったが、城主和田惟政はその郊外に出て戦死し、残るは伊丹・池田のものばかりとなった。

ここで荒木村重から降伏をすすめられたが、両者はそれをこころよしとはせず、敵中に入って華々しい討死をとげた。

こうして芥川の城も落ち、荒木村重はその功によって、摂津の守護職となり、伊丹の城にすることになった。ここで芥川に残った伊丹の一族は今さら伊丹へ帰ることもできないので、淀川を渡って戦乱を避け、その川向になる交野地方へ潜入した。

しかし、ここも織田軍の搜索が厳しいので、ついに寺村のかいがけの坂道を登って、龍王山のうしろ、傍示の国境に逃避して、いつしかここに永住することになった。

したがって傍示の伊丹家は、今より449年前(1573)にはじめてここに来たことになる。

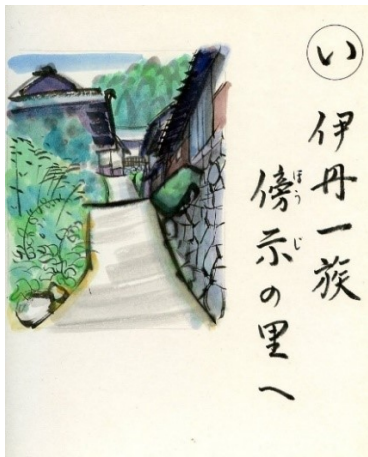
伊丹親興と足利義昭

- ・永禄十一年(1568)伊丹城主は伊丹兵庫頭親興だった。
- ・足利義昭(後に、15代将軍)は、三好一族に追われて、尾張(愛知県)の織田信長に保護を求めた。
- ・信長は近江(滋賀県)の敵を破って、義昭を擁し、ようやく京都に入った。
- ・前将軍義栄(14代)が病死したので、義昭を15代将軍の地位につかせ、天皇はいえつに拝謁して岐阜に帰った。
- ・三好一族はこれを聞いて、信長の京都不在に乗じ、武力のうすい将軍のいる六条本国寺を包囲して、これを攻め立てた。
- ・この急を伝えられた摂津の伊丹兵庫頭や池田八郎三郎(池田城主)は、ともに急いで義昭の救援に向い、六条付近まで行って三好・松永等の兵と激戦の末、ついに三好方を敗退させてしまった。
- ・天正元年(1573)将軍義昭と信長の間がうまくいかない。
ついに義昭は信長にそむいて、武田・本願寺・浅井・浅倉・毛利等、国々の反信長派諸大名かたらい信長はその知らせを受けると、いそぎその主力をひきいて上京し、一挙に榎島を攻め落とした。
義昭は城をのがれ出て、山城普賢寺に入り、頭を丸め僧形となって降伏した。
- ・そこで信長の臣木下藤吉郎は、義昭を河内若江の三好良継のもとに送りどけ、ここに室町幕府は完全に消滅したのである。
この戦いには、伊丹城主兵庫親興も、将軍晴れの合戦と、その一族を従えて参加したが、なにぶん織田方の総勢が、宇治川を渡って攻め寄せたので、はげしい乱戦となった。
そして味方はたいてい討死し、将軍の行方もわからないので、ついに巨椋池を船で渡り、淀川を下って、摂津芥川の城にたどりついた。

参考文献:交野町略史・復刻編

おっさんのブツブツ

- ① 室町時代になってもまだ、今の西傍示(河内の国)は出来ていなかったらしい。
- ② 傍示という地名は早くから出来ていた。東傍示(大和の国)できていたのかなあ?
- ③ この附近の山は三宅山荘園といって最初の交野郡司の支配下だったが、ここに住民がいないものだから、大和の方から入りこんで山を荒らして困るので延喜十七年(917)河内国司に願い出て、国境に標木を立てた。
- ④ それが**ほうじ**の名のはじまりである。ほうじ→傍示→傍示。
- ⑤ 江戸時代の国境(傍示)は、「ごみの木地蔵」辺りだったが、明治の初め「みずたれさいめ」と改められ「スマイル地蔵」のところに境が変わったらしい。
- ⑥ 京都の天皇や貴族たちの熊野詣りが盛んだったそう。
- ⑦ 傍示の戸数は12軒(大正3)が昭和15年に現在の5軒になりました。



交野かるた



傍示の里(河内の国・西傍示)



中世熊野街道傍示八王社

うずもれ地蔵



かいかげの道入口



うもれ地蔵



正行寺さんより正念入れ

交野の春のかいかげの道 うずもれ地蔵さま起きられた
 長いあいだの眠りをさまし 春のひざしをあびられた
 伸びをなされてお地蔵さまは お姿みなに見せられた
 何をいとおて長の月 地に顔かくしておられたか
 里の人にゆりおこされて 心のぬくみに怒りもとけて
 みな願いにうずかれ かくした顔をあげられた
 うずもれ地蔵さまおきた目に ひとつとゆれる山すみれ
 交野の春にかいかげの うずもれ地蔵さまおきられた

交野草子(三) 廣岡昌子著

このような素晴らしいお話に出会いました。

まだまだ交野には、お話を聞いて下さる仏さまや、お話しのできる石の仏さまがいらっしゃいます。
 石の仏さんばかりじゃありません「人」・「仲間」「すきでんねん交野人」たちと語らいも、大事でっせ！
 是非、膝をつき合わせ語らいの時を持つのも「心の道しるべ」になりまっせ！

=了=